

## □文献紹介□

### 乳癌患者の内分泌療法によって生じる脱毛症

本論文では、後ろ向きコホート研究により乳癌患者に対する内分泌療法による脱毛症(endocrine therapy-induced alopecia:EIA)の臨床的な特徴やQOLへの影響が検討された。対象は、2009年1月1日～2016年12月31日の期間に、Memorial Sloan Kettering Cancer Centerの皮膚科を受診し、EIAと診断された女性乳癌患者112名であり、年齢の中央値は60歳(34～90歳)で、乳癌のステージは、0～Iが97名(87%)、II～IIIが12名(11%)、IVが3名(3%)であった。評価項目は、脱毛パターン、EIAによるQOLへの影響、ミノキシジル局注の効果とされた。頭皮の写真を元に、有害事象共通用語規準を用いて推定された脱毛症の重症度は、96名(92%)でグレードIであった。脱毛パターンを前頭頭頂生え際に主に脱毛がみられるベーシックタイプ(C, M, U)と頭頂部に主にみられる特異的タイプ(F, V)に分類したところ、EIA患者ではM型が多かった。トリコスコピー所見では、

軟毛に加え毛直径の不均一性を認めた。Hairdex scoreを用いた評価では、脱毛が患者のQOLを悪化させることがわかり、特に情動へ多大な影響を与えていた(mean [SD], 41.8 [21.3];  $p < 0.001$ )。また、ミノキシジル局注を受けた46名のうち37名(80%)で6か月以内に中等度または著明な脱毛の改善を認めた。

以上より、EIAは男性型脱毛症に類似したパターンを呈し、脱毛の程度はグレードIの比較的軽いものが多いにもかかわらず、患者のQOLには多大な影響を与えることがわかった。

Freites-Martinez A, et al: Endocrine Therapy-Induced Alopecia in Patients With Breast Cancer. JAMA Dermatol 154:670-675, 2018

(慶應義塾大学 増田 容子)